

(十) 以上を總括すれば

二十八宿は支那に於て周初又はそれ以前に設定され、春秋中期に支那を出發し、中央アジアを経由して印度に傳はり、更にペルシヤ、アラビヤ方面に傳つたものである。

叢 說

中學校に於ける歴史科の沿革並に其教育的價值に就て

文學博士 小 西 重 直

一、獨逸及日本に於ける歴史教授の沿革

立論の順序として最初に先づ中學校に於ける歴史

科教授の沿革の大體を述べ次に其教育的價值に就て私見を論述して見やうと思ふ。沿革の方面では西洋の代表者として獨逸の人文中學に於ける狀況の一般を述べ聊か日本のと對照の材料に供したいと思ふのである。

獨逸の中學に於ては中世紀にありては一般の教育が宗教的であり、且又歴史の學術的研究も十分發達しなかつた爲めか、聖書の創世記や、希臘羅馬時代の斷法的史談や、帝王や法王などの年代記の様なものも教授するに止り、中世紀の末頃には都市の發達に伴ひ其年代記などをも教授して居つた様であるが未だ歴史科といふ獨立の教科目はなく宗教や言語の教授に於て取り扱はれて居つたのである。十五世紀の末より十六世紀の初めにかけての人文主義者は古典の研究上歴史研究の必要を感じ、フツテンの如きは歴史の研究上獨逸民族の統一にも着眼し、ウキンフヘリングは千五百〇五年

に初めて獨逸歴史の教科書を著はし十六世に於て已に七版を重ねるに至つたと傳へられて居る。

(Kehr-Geschichte der Methodik des Deutschen

Volkschulunterrichtes II. 77) 宗教改革時代に入りてはルーターの如きも中學校の教科として歴史の輕んずべからざることを説き、殊にメランヒトンは千五百十八年八月二十九日ウキテンベルグ大學に於ける就任演説に於て歴史は學問上自然科學や倫理學に對して實例を示すもので市民生活や家庭生活を處理する上にも必要であり若し國家の行政が歴史を閑却するならば恰かも世界より太陽を取り去るが如き損失を招くに至るべしと論じ、大學學生の歴史研究の必要を説て居る。彼の力によりて歴史が直ちに中學校に於て一般に獨立の教科となる程の發達をなすには至らなかつたのであるが彼の門弟の中には普通教育に於て歴史の尊重すべきことを主張し此を教授の實際に表はすに至つ

たものもあるのである。大學に於ても十六世末には哲學大學の八人や十人の教授の中に一人の歴史擔任の教授即 Professio Historiarum を見出し得ることになつたのである。(Schmid-Geschichte

der Erziehung 1889, Q.2-S.211; Paulsen Pädagogik S. 355) 然し歴史教授が中學校に於て重要な意義を有することを高調したのは實に實科的人文主義者たるコメニウスであつて、歴史教授は彼によりて一層自覺時代に入つたと認められて居る。千六百五十七年に著はした彼の「大教授學」を見るのに教育系統を四階段に分ち誕生後六歲迄は母親學校と稱して家庭教育の時代となし、六歲より十二歲迄は母語學校、十二歲より十八歲迄六ヶ年間は拉典學校、其後六ヶ年は専門學校の時代となして居る。而して其拉典學校は所謂中學程度の學校であるが、彼は此學校に於ける歴史教授の必要を論じ、歴史は人間陶冶に最も貴ぶべき教科であり、

人生の眼であると論じ、六ヶ年に亘りて各學年に教授材料を按排して居るのである。尤も彼は聖書の話や宗教儀式に關する歴史や、自然物の歴史として記載の博物なども歴史の中に含まして居るのである。コメニウス以後歴史教授は中學校に於て益重要な地位を占め、十七世紀の末頃に起つた信念派のフランクの中學に於ても十八世紀の汎愛學派のバセドウの學校に於ても歴史は獨立の教科となされて居る。啓蒙時代は理性本位時代で比較的歴史を輕んずるの風があつたにも拘らず、歴史は理性的判斷力を養ふの力なりとなし、中學校に於ける歴史教授は相當に尊重せられ、フリエドリツヒと大王の如きも其の獎勵を圖つて居るのであつて其時代の教育當局者であつたツエドリツクなども一週間六七時間歴史を教授することは毫も過剰ではないとまで高調して居る様である。十八世紀末十九世初にかけては新人文主義の思潮が起り昔の人文主義が拉典的文藝復興の傾向であつたのに對して新人文主義は希臘的文藝復興の傾向を帶び、昔の人文主義が古典思想や、古代の人物を崇拜して、動もすれば自己の立場を忘るるの傾向ありしに對して、新人文主義は古典や古代の人物を貴びながらも民族精神や國民精神の獨立に志し、合理主義者の如く一般的抽象的ならずして、寧ろ浪漫主義者の如く特殊の具體的の傾向を取るの結果は一般に學校に於ても歴史を尊重するの風益著しくなり、世界歴史の外に尙ほ國史の教育的價值をも漸次明かに認むるに至つたのである。政治とナポレオン戦争の如きは拉典文藝より希臘文藝に轉せしむるの力があり民族や國民意識を高からしめ歴史の教授の上に大なる刺戟を與へたるものであらうし、歴史夫れ自身の研究も漸次科學的に進歩すべき勢を呈し、教育上の學理研究の方面に於てもヘルバルト學派の如きは情操の教育の上に歴史が

重要なる學科なるべきを説きシユライエルマッフ
エルの如きも歴史は道德の繪草紙であると説くに
至り歴史教授は各方面より大なる刺戟を受くると
なつて來た、斯くしてヘーゲル哲學の影響を受
けたシユルツエが千八百三十七年に作製せる人文
中學の課程に於ては第一年級より第九年級迄全學
科の時數一週間二百八十二時間の中歴史及地理に
二十四時間を配當して居る、千八百五十六年の改
正案はウキーゼの計畫に成れるものであるが從來
の過重を一般に輕減し第一年級より第九年級迄の
全學科の教授時間を二百六十八時間に減じたので
あるが歴史及地理には却て一時間を増して二十五
時間となしたのである。拉典語及希臘語の時間に
比すれば固より僅少であるけれども獨逸語に比す
れば五時間も多いのである。更らに千八百八十二
年のポーニツツ案に於ては總時數はウキーゼ案の
如く二百六十八時間であるが拉典語希臘語の時間

を減じ國語、佛語、數學、理科の時間を増し歴史
及地理も二十八時間となり三時間の増加を示して
居る。千八百八十九年五月一日に於けるカイゼル
の諭達は獨逸の近世史に重を置き皇室は下級労働
者に對して保護を怠らず、社會主義なるものは國
民の幸福と一致するものではなく主義夫れ自身は
危険なるものであることを歴史教授に於て事實上
より教授すべしと希望し、歴史教授の内容に亘り
國家主義の色彩を濃厚にしたのである、畢竟獨逸
に於ては千八百七十八年より千八百八十七年迄十
年間に於て社會黨が三十一萬一千九百六十一人よ
り七十六萬三千百二十八人といふ激増をなしカイ
ゼルは其勢力を恐れ歴史教授の方に依りて彼の希
望する國家主義の力を増さんとしたるに外ならな
いのである。次で其翌年千八百九十年十二月四日
より十七日迄伯林に開かれたる全國教育會議には
カイゼル自ら出席して熱烈なる演説を試み教育一

般に關して獨逸的國家主義の徹底を促がし、希臘の青年や羅馬的青年を作るのは吾人の希望でない吾人の希望は獨逸的青年を養成するにありと絶叫したのであつた。斯くて此十二月會議の結果として千八百九十二年に改正された人文中學の課程に於ては總時間數に於て從來よりも十六時間を減じて生徒の一般の負擔を軽くし、拉典語は全學年を通じて一週十五時間を減じ希臘語も四時間を減せられた。之れは主として國家主義の立場よりなされたのである。然るに歴史及地理も二時間を減せられた。二十六時間となつたのであるが之れは一般に生徒の負擔を軽減するの立場よりなされたものである。つて、而かも其教授の價値に就ては從來よりも一層尊重せらるることになつたのである。然して是に注意すべきは一年及二年に於て國語を國語及歴史物語となし希臘や獨逸の歴史物語に關し各級一時間宛の時間を取るに至つたことである。要するに獨逸に於ては十七世紀迄は歴史教授の必要を漸次自覺せる時代であり、十八世紀は試験的實施の時代でありとすれば十九世紀に入りては教授の確定時代となり十九世紀の世紀末よりは其内容に於て一大改革の時期を呈して居ると言ふべきである。翻つて我日本に於ける歴史教授の沿革を大觀するに太寶令所定の大學には紀傳と稱して主として支那の歴史を教授せるあり、文章院勸學院其他の私學に於ても亦然り、紀傳を研究せる者は官吏に擧用の際最も重を置かれたるの時代もあつたのである。徳川時代に入りては家康は國史を重んじ家綱は弘文館の課程中に經科、讀書科、文科、倭學科と相並べて史料なるものを置て居る。諸藩の學校に於ても漢學皇學等の學科に於て歴史を講せるあり、又加賀藩の明倫堂や福井の明道館の如く特に歴史なる學科を設くるあり、高知の致道館の如く史學なる科を設けて居るものもあつたのである。或

は荷田春滿の様に國學校を起し律令、萬葉古今等の外に尙ほ國史を講せしめんとの計畫をなしたのもあつたのである。明治に入りては明治五年學制の領布の結果によりて起れる中學に於ては下等中學即十四歳より十六歳迄三ヶ年（第六級より第一級迄）の課程の中に第五級より一級迄二ヶ年半の間史學なる學科を設け、是に歴史は中學教育に於ける獨立の教科として其地位を確保するに至つたのである。又同年外國教師にて教授を行ふ中學の規則をも制定し下等中學（第六級より第一級迄）の第二級より上等中學（第六級より第一級迄）の全體に亘り史學の教科を置いて居るのである。十四年七月發布せる中學教則大綱に於ては中學の初等を四ヶ年となし高等を二ヶ年となし其初等科四ヶ年大學に入學するに至るまでの時間數に就て見るのに一週約二十一時間となるのであつて獨逸に比すれば少しく多くなつたのであるが日本の高等學校に亘りて歴史を教授することにした。此頃は小學の歴史に於ては尊王愛國の志氣を養ふことに留意せるが中學校に於ても恐らく類似の傾向なりしならんと推測せらる。十九年四月の中學校會に於ては尋常中學五ヶ年に亘り一週七時間の歴史教授を課し二十七年三月の改正によれば歴史地理に對し全學年を通じ一週十六時間となり、三十四年の中學校會施行規則にては全學年に亘り十五時間の歴史及地理となつて居る三十九年六月牧野文部大臣時代に於て時弊矯正に關する心得を訓令し社會主義の如き危險思想に感染せしめざるを諭し次で小松原文部大臣の時代に於ても此點に大なる注意を拂ひたるが此時代に於て歴史教授は一時國家的色彩を濃厚にしたのである。而して現在は三十四年の改正案の如く一學年より五學年迄、歴史のみにて一週九時間の教授時數になつて居るのである。而して此を小學校より中學及高等學校を経て

では歴史を修むるものは第一部生のみであるが獨逸に於ては醫科に入るものも理科に入るものも少くも一週十五六時間の歴史を修むることになる、又日本に於ては中學のみにて終るものは小學を通じて約一週十二時間許りになつて居るのである。

教材に關しては獨逸は國史を主として之れに關係を付けながら他國の歴史をも教ふる様な傾向を取つて居るが之れは獨逸の歴史の過程其ものに斯様な取扱を可能ならしむる特色があるからの事で日本の如く現代は兎も角過去に於て比較的西洋諸國に關係の少なかつた歴史的過程を有する國に於ては獨逸の通り模倣することは出来ない。然し日本の中學校に於ける歴史教授法は多くは講演式であるのに獨逸のは練習主義を加味し歴史によつて生徒の精神を鍛へることに力めて居るのは参考となすべきである。

二 歴史科の教育的價値

以上に述べた如く歴史科は漸次重要な地位を占めて來たのであるが然らば其教育的價値に就て如何に考ふべきであるか、中學校は専門教育の機關でなくして高等の普通教育を施す場所である。高等の一般的陶冶を本旨として居るのである。従つて其學科目に於ても専門の科學や職業を主とするのではなく、青年の生活全體を向上せしむべきである。此を自覺的に鍛鍊すべきである。即ち相當の理想に向つて努力せしめ、其努力の方法をも指導し漠然たる通俗的の生活より相當の原理や理由の下に組織的に生活を進めて行く様に指導すべきである。小學校に於ても固より斯の如き意味に於ける普通教育を施すものであるけれども、中學校は小學校よりも更らに一層高き程度に於て此任務を果す場所といふてよいのである。而して歴史も實に他の學科と協同して此任務を果すべき教育的性質を有するものであるが、他の學科と區別されて

獨立の地位を占めて居るには相當の特殊の教育的價值がなければならぬ。中學校歴史に於ては自然的及社會的環象の中に立ち一面此等に順應すると共に他面には此を支配しながら何等かの理想に向つて努力しつゝあつた所の過去の人間の精神が社會的意義を有する程度に於て表現せる所の具體的事實を或程度迄因果の關係に於て組織的に教授するのであらうが此場合に於ても歴史はラッアルスの説く様に他の自然科學が抽象的一般的であるのに對して具體的各個のであり又全體の集成的である、狹義の他の科學は論理的的一般概念の學として其概念を構成するには各個のものより抽象され歸納されねばならぬけれども、歴史的概念は各個のものからの具體的事實によりて成立するのである。他の科學に於ては各個の事物は一般的概念の中に含まれて居る所の一例證と見做さるるも、歴史に於ては各個の事柄は全體的事實に對して新し

き内容を加ふることになるのである、他の科學に於ては各の事柄は唯だ一般的概念の反復に過ぎぬけれども、歴史に於ては各個の事實は全體の内容を豐富にするのである。(Zeitschrift. Volkpsychologie u. Sprach-wissenschaft 3Bd. S. 48: Lazarts — Ueber die Ideen in der Geschichte) 要するに中學校に於ける歴史は一般的論理的概念の教授ではない、抽象的の法則を取り扱ふものではない、リツカートなどのいふ様に各個の一回起生的の事業を取り扱ふと共に全體の組織的具體的事實を教授するのである、歴史は或程度迄因果の法則を豫想するけれども因果の法則其ものを取り扱ふのではない。具體的事實を單に報告するといふことは學術上に價値があるのみでなく教育上にも大なる價値を有するのである、吾人はデウイーの如く教育上事實の報告を退くるものではない、事實其ものを知るといふことは知見を擴張する上に極めて重

要の事柄である。然れども教育に於ては尙一步を進めて事實を報告することによりて生徒に好學心や研究心を暗示するとか又は過去の人が如何に生活したか、如何に努力したか、如何に成功し失敗したかを暗示することを必要となすのである。原因結果の集積のみを報告せずに力ある活動者として事實を示す所に教育上の價値が一層表はれ來るのである。(Dewey-School and Child 1906 P.6)

然しながら歴史は生活を指導せん爲めの直接的の說教ではない、修身科に於ては道德律に従ひ、青年の生活を参照し正面より生活上の心得を説くも歴史教授は單に生活に對する暗示的刺戟であるべきである。詳言すれば具體的事實を報告する間に於て人生の發展に所縁ある法則を暗示することもあるであらうし、或る場合にはヘーゲルなどの主張の如く歴史は絶對自由の進化發展の過程である様な感想を暗示し行くこともあらう。又或る場合にはカントの論ずる如く歴史は道德的自律の生活に達する経過であるといふ様な感を暗示することもあらう。其他場合によりてはヘルダなどの見方の様に人生史は自然史の繼續的経過であつて人道の發展を理念とするとかフイヒテの考の如くに理性の發展の過程であるとか、又は教材の如何によりてはマルクスなどの唯物史觀に類する様な感想なども暗示することもあるであらう。斯く言へば

とて哲學者の間にも歴史家の間にも異論のある色々な史觀、色々な歴史哲學上の見方を積極的に教授することは中學校の歴史教授の任務ではないのみならず實際教授することも甚だ困難とする所である。唯だ歴史の材料の如何により、教授の態度の如何により場合に應じて種々の史觀の範疇に包括せらるる所縁的感想を暗示することは敢へて不可能ではなく、生徒の側に於ても史實によりて色々の暗示を受くる興味と自由とを有するからして

教授者は適當に此を指導する必要が起るのである。要は歴史教授は歴史哲學的の史觀によりて、拘束さるべきものではない、飽く迄も具體的事實其ものを本位となすべきであるけれども事實の報告のみでは教育的價値は十分とは言はれない、其報告によりて青年の生活に關係ある何等かの暗示を與へねばならない、是に初めて歴史的報告は一轉して歴史的敎育となるのである。

以上の論旨に基き中學校に於ける歴史の教育的價値は論理的に分析すれば一方に實質上の價値と他方には形式上の價値とがある、實質上の價値とは歴史の事實其ものを正しく報告する場合であつて形式的價値とは其正しき報告によりて生徒の精神に何等かの暗示を與ふる場合である。而して此兩様の價値を實際と青年の心理的方面により見れば青年に於ては此兩様のものが一體として同時に理解され又感得さるのであつて是に論理的の二様

の價値が心理的に一體統合の教育的價値となるのである。

然らば歴史の敎授に於ては生徒に對して如何なることを暗示すべきであるか。余は此點に就て第に青年に正しき自己意識を暗示すること、徳性修練との志操を暗示すること二の事項に分けて其要點を論述して見やうと思ふのである。

パウルゼンが其敎育學 (Paulsen-Pädagogik 1911, S.30) に論じて居る様に人間の本質といふものは單なる個人に於て研究さるべきものではない。又一時代のみを見ても不十分であつて民族や國民や世界人類の過去幾千年の歴史的過程をも研究し初めて人間の本質も理解さるのである。個人々々の自己に對する正しき意識も單に現在の及自分一人に就て内省するのみによりて得らるるものではなく包括的な歴史其ものをも研究することにより得らるのである、少くも歴史的考察を必要と

するのである、孤立的の人間は正しき自己意識を有することは出来ない、社會的に考へ尙ほ進んで歴史的に考ふるにあらざれば眞實の自己意識を有することは不可能である、従つて世界に於ける自己の地位、一國に於ける自己の地位をも十分に理解することが困難な譯である、其結果は國民としても人類としても十分に自己の責務を果たし得ざることになるのである。此故に歴史教授の統合的價値は正しく史實を教授することによりて青年をして正しく自己を理解せしむることである。否な理解に對する暗示を與ふることである。青年をして自分は現在の存在ではなく過去の祖先と繼續的存在である、單なる自己の理性的存在ではなく歴史的存在である、自己の主觀的理性と歴史上の客觀的理性とが自己の意識の内容であつて夫を統一する所に自己本來の存在があるのであるとの考を青年に暗示する必要がある。個人々々は其心身に於て縱令祖先と相異の點ありとも相當の遺傳より自由なる能はざるが如く一民族や一國家の一人として一種の社會的遺傳ともいふべき歴史的過程より自由になるとは出来ない、自由であると思ふのは夫を自覺せぬからの事であつて事實上自由になることが出来ないのである。即ち人本來の精神の内には當然歴史的過程を豫想されねばならぬものである。此精神本來の本質に就て自覺を喚起し歴史的存在の自己意識を暗示する所に歴史の教育的價値が表はれ來るのである。斯くして青年は過去祖先の偉業に對しては恰かも自己が此を行つた様に一種の誇を感じ其失敗に就ては自己自らが失敗者である様に殘念な氣分に打たるるのである此れ皆自己の歴史的存在を意識するより起り來る結果である此故に歴史的存在の意識は臆がて將來に對する建設的創造的精神を喚起する準備的意識であつて過去のものとして葬り去らるることなく將來に

生命を有することになるのである。フイヒテが「獨逸國民に告ぐ」の講演に於て獨逸の文化の歴史的特色に就て論述し以て國民の自覺を促がしたのも

歴史の斯様な力を信じて居つたからではなからうかヂエステルウキツヒは歴史は事實は如何に起り何によりて起つたかを教授するの外尙史實は人生の發展に如何なる意味を有して居るかを教授せねばならぬと論じて居るが (Sietewegs Ausgewähl.

The Schriften I. S. 189) 人生發展の第一義は先づ個人々々をして自己に關する正しき意識を有せしむることであると思ふのである。客觀的に歴史的事件が如何に人生の發展に貢獻したかを暗示するとは固より必要の事なるべきも吾人は先づ主觀的の内面に入り歴史的存在の自己意識を體認することに暗示を與ふることが教育上の根本價值であると信ずるのである。而して斯の如く一民族や一國家の一人としての歴史的存在の自己意識を暗示する歴史の

教材は決して其自國の史のみに限らるゝものではない、他國の歴史をも知る時に初めて眞に自國の歴史の特質も了得さるゝのである。

歴史科の第二の統合的教育的價值として認めらるるものは其徳性の涵養に關する暗示である。

獨逸に於ては已に十五世紀の半頃に於てジキスムンド、マイスターリンは其著ヌエルンベルグ年代記中に青年は其父祖の奮闘困苦の努力の狀態を知つたならば其品性の修養上に益する所あるべしと説て居ると傳へられて居るが其後も教育界に於て歴史教授の徳性涵養に密接の關係を有することは一般に認められて居る、我日本に於ても同様である。徳性の涵養に關しては根本としては内向的修養の方面と此修養が外向的に發現し其國を愛するとか廣く人道の美性を發揮するといふ様な點に存するのである、勿論歴史は道德律的の史觀の拘束を受けて居るものではないからして如何なる場合

に於ても常に勸善懲惡的の規範的應報的統一體を青年に示すことは困難である。然しながら材料によりては一面道德的判斷の材料も表はれ來り他面には道德的感激を起し得る材料もあるであらう。而かも歴史其ものは修身教授ではなく、青年の側に於て有する相當の道德的生活に對して其體認する道德律を歴史上の事實の上より證明するの暗示を與ふるか又は其徳性に刺戟を與ふるのである。殊に中學時代は小學時代とは異り、機械的練習よりも感激的刺戟を與ふるに適應する時代である、此點に於て中學の歴史は教育上特殊の價值を發揮すべきであると思ふ。感激といふ心的状態は歴史の材料、此を取り扱ふ教師の心持、此を受取る生徒の氣分の如何によりて起るものである。其教材の方面に於ては青年が理想的に要求して居りながら此を實現するには普通以上の努力を要すと信じ居るものを歴史上の偉人は此を實現したか又は實現

に向て努力しつゝあるかの史實である。教師側に於ては教師自ら此教材に對して感動の氣分になつて居らねばならない。又青年の側に於ては此種の感動的教授を破壊する様な反抗的氣分を故意に有して居らないといふことが必要である、尤も場合によりては教授者は此反抗的氣分に打ち勝つて青年を感動せしむることも出来るのである。而して若し此三方面が調和的に統一して教授として表はるゝならば青年は其史實といふものは過去の事であるとか、夫れは自分を離れた客觀的事實であるといふ様な知的差別觀を意識の外に驅逐し漸次史上の偉人や史上の事實を自己の主觀の中に移し入れ主觀客觀の妙合的感境に入り所謂感激の極致に達するのである、斯くて、歴史上の史實其ものは個人にとりては間接經驗なるも教授の力によりて青年の直接經驗となり、青年は自己の内面的奥底に於て一度偉人の生活や偉業に關する心的經驗

をなし、此心的經驗が意識の中に止まり自己の思想や行動をも支配する所の内面的道德生活と成らば感激教育が徹底的に其効を奏したと言はれるのである。而かも修身教授によりて正面的に説かるる場合よりも歴史教授の暗示的敎訓が永く青年の心理を支配することが少くはないのである。

最後に一言したきは青年は斯様に歴史教授によりて自己に關する意識を規定する上に又其徳性の修練の上に暗示を受くる間に史實として授けらるる所の事實の關係を考察し比較判斷の能力をも練ることが出来るのであつて、米國などに於ては千八百九十二年に國民教育會より中學校の教育調査の爲めに選任された十人委員の報告(Report of the Committee of ten on secondary school studies)にも精神の發達には觀察力や論理的の推理能力や比較判斷の力などの三方面の修練を要するが語學及理科は觀察の習慣を養ふに適し數學は推理力を發

達せしめ、歴史は比較判斷の力を養ふに好適の敎科である、政治家が歴史を研究するの之れが爲めであると説て、此點に於ける教育的價值を主張して居る。又シカゴ大學の教授ジャッドの近著「中學敎科目の心理」(Add-psychology of High school subjects 1914: p371-391)に於ても此れに類する意見を發表して居るのである、余輩も亦固より此種の價值を認むるものであるけれども是には主要なる價值に就て一言したのである。

輓近に於ける東洋

史學の進歩 (上)

文學士 羽 田 亨

此の一篇は去る十月の史學研究會例會の席上で、現今西洋の東洋學者が一般に如何なる方面の研究に従事し、如何なる成績を擧げつゝあるかを、極めて簡単に述べたものに多少の